今こそ、備えを強化する時⑨

昨年11月26日(土)、のいちふれあいセンターで開催された「香南市南海地震フォーラム」。約300人の来場者が、地震、津波に関する講演やパネルディスカッションに耳を傾け、改めて地震・津波の脅威を知り、命を守る対策を確認しました。今回は、フォーラムの講演内容を編集して掲載いたします。

※次号ではパネルディスカッションの内容を掲載します

■問い合わせ
防災対策課
☎57-8501

3.11 pm 2:46

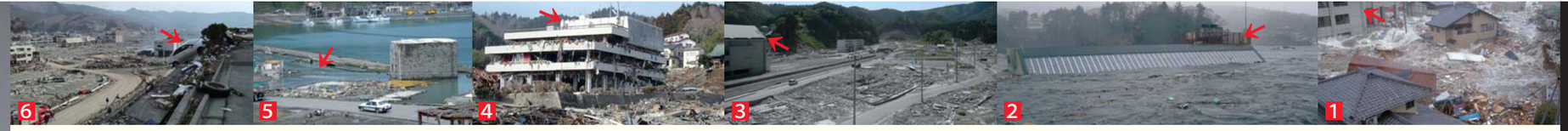
その時 何が起きたのか

女川町職員　復興担当の鈴木氏による講演

東日本大震災の規模
M9.0（国内観測史上最大）
宮城県内の最大震度　7
女川町の震度　6弱

11月17日現在

	全　国	宮城県	女川町
死　者	15,839人	9,503人	452人
行方不明者	3,642人	1,994人	375人
建物（全壊）	120,241棟	77,034棟	2,923棟



1津波が市街地を襲う。写真矢印は町の施設「生涯教育センター」。
2生涯教育センターは高さ約20mの４階建てで、建物が全て水没するくらいの津波の高さになりました。ここにいた職員は、屋上（矢印）に逃げてなんとか助かりました。
3震災後、がれきの撤去をした生涯教育センター（矢印）付近。住宅は流され電柱が寂しく建っています。
4震災後の女川町役場。写真矢印は鈴木氏が避難した庁舎の屋上。
5海岸の岸壁では、地盤沈下（矢印）により、現在も満潮時には浸水している。
6海岸近くの海抜16mの高台にある病院の敷地フェンスに、車（矢印）が刺さっています。この病院は、１階（５m）が浸水しました。

地震＝津波の意識

この日は、雪が降ることが少ない時期に小雪がちらつく珍しい天気で、役場は3月定例議会の最終日でした。午後2時46分、議会中に激しい揺れを感じ（震度6弱）直ちに議会を休憩。揺れの大きさから津波が来ると確信しました。気象庁から津波警報が出る前に、町防災無線で避難を呼びかけました。そして、若手職員に住民を避難誘導するため、避難地となる高台へ派遣しました。

この行動は、日頃からの津波避難訓練と、実際に津波警報が発令された際に、何度か経験をしておりました。その後、大津波警報が発令されると、防災無線をサイレンに切り替えて、避難を呼びかけました。

地震から三十数分後、庁舎の2階から沖合を見渡すと白い壁が見えました。津波でした。これはまずいと思い、1階にいた女性職員を全員4階へ避難させました。女川町役場では、執務中の職員は全員助かりました。

私たちが避難した役場は、昭和47年に完成した庁舎で約40年が経過しており耐震補強が必要でしたができていませんでした。津波が来た時は、役場の3階まで浸水し、柱の一本でも壊れてしまえば、庁舎自体が崩れ去ってしまう危険がありましたので、恐怖を感じながら屋上に避難していました。

ライフライン不能

役場の屋上で難を逃れた私たちは、夜暗くなってから裏山に避難し、一夜を明かしました。その後、朝になって高台にある中学校で、災害対策本部を立ち上げましたが、毛布や食料などの備蓄品が津波で流され水も出ない状況では、できることが限られていました。地震と津波によってライフラインは、全て使用不能となりました。ガスだけはプロパンガスだったので、津波の被害に遭わなかった高台では使用することが可能でした。

連絡手段もなく女川町の情報がラジオ等で流れたのは、震災から数日経った後でした。状況が何も分からず、こちら側からも連絡ができない状態でした。

想定外だった津波

女川町沖には、海面から5.3mあった湾口防波堤が津波で破壊されました。さらに、防波堤を突破した津波は、リアス式海岸特有の海岸線が入り組んだ地域へ来襲し、海岸近くの平野や山に挟まれた谷間の住宅を襲いました。震災以前は、津波高の想定を宮城県も女川町も6mとしていましたが、実際には想定外の20mでした。安全であったはずの避難所（25カ所）の半分は津波で破壊されました。

津波の脅威

津波は、谷間を狙ったように勢いよく流れ込み、海岸から約2kmの地域まで遡上し、だんだんと高さを増していきました。

●報道されて知っている以上の状況のひどさに心を打たれました。
●3・11の津波は衝撃的な映像に息をのみました。女川町役場としての取り組みが地震・津波以前から、そして津波後の取り組みが堅実だとわかりました。

プロフィール

鈴木浩徳（すずき　ひろのり）

1960年生まれ
宮城県石巻工業高等学校　卒業
2000.4　総務課財政係長
2006.4　建設課参事
2010.4　企画課長（復興担当）～現在

津波が襲った地域の木造家屋は津波で倒され、鉄筋コンクリートの建物でさえも横倒しになりました。地形や土地周辺の環境によって津波が強く当たるような場所では、鉄筋コンクリート造りの家屋なども安心できませんでした。

地震の影響

海岸部では地盤沈下が1m程度あり、満潮になると海水で海岸付近の土地は再び浸水します。住民からは1日に2回津波がやってくると嘆かれますが、なかなか良い案がなく対応策ができていない状況です。また、GPSで確認すると陸地が海側へ何mか動いていました。

知ってほしい

地震、津波の特性として皆さんに知っていただきたいことは、津波は何度も繰り返し押し寄せてきます。何度も押し波、引き波を繰り返します。木造家屋をなぎ倒しながら奥へ奥へと進んでいくような状態になります。

海抜がそれほど高くない海から遠く離れた地域でも津波の警戒をしなければいけません。ここまでは来ないという意識があったために、避難が遅れ多くの方が実際に犠牲となりました。津波警報が発令されたら海から遠い平地に逃げるのではなく、必ず高台に逃げてください。また、津波が来ている最中にも余震は何度も起こっています。

被害状況

女川町の被害の状況としては、被災当時の人口10,014人に対して、11月17日現在の死者・行方不明者は827人で人口の約1割が、犠牲となりました。

住家の被害状況では4,424棟の内、約6割が全壊。半壊や一部損壊などを併せると約9割の家が何らかの被害を受けています。被害がなかったのは約500棟だけでした。また、非住家として倉庫や店舗、工場などについても同じような状況で、2,087棟の内、全壊は約6割。半壊や一部損壊を含めると約8割が被害を受けています。

捜索活動

捜索活動の状況では、被災後すぐに消防隊や自衛隊が救助に当たってくれましたが、津波の勢いがすさまじかったこともあり、生存確認はほとんどありませんでした。避難所生活では、自衛隊の方に、炊き出しやお風呂など支援していただき大変お世話になりました。

最大25カ所の避難所

避難所の状況では、最大で25カ所を設けました。震災直後は、ライフラインもない状態で、3月11日、12日は人数を数える余裕がありませんでした。13日になって初めて人数を数えると5,720人が避難しており、女川町で最も多く避難者を収容した日となりました。そして、避難所の閉鎖時期は11月9日でした。前日まで84人の方が残っており、仮設住宅の完成を待っている最後の避難者でした。この最後に完成した仮設住宅は、全国で初の3階建てのものでした。津波の心配のない安心できる高台は限られていたため、3階建てにすることで、土地不足を解消しました。

復興への道

復興は8年間で成し遂げたいと考えています。基本的には住居は高台に建て、商業地などは、平地へ建てることを基本ラインとしたまちづくりを行うよう進めています。

現在は、サンマ漁やホタテ、カキなどの養殖業が始まり復興の兆しが見え始めています。

今後とも女川町の復興のため、ご支援のほどよろしくお願いします。女川町は新しく生まれ変わります。

女川町でのサンマ漁

【講演の感想】●必ず起きるといわれている南海大震災がくるという高知にもかかわらず、自分には関係ないと思っていた部分がありました。東北の大震災をきっかけに危機感がでました。つらい思い出でしょうが、お話いただきありがとうございます。家族を守るため、いつも心に置いておきます。